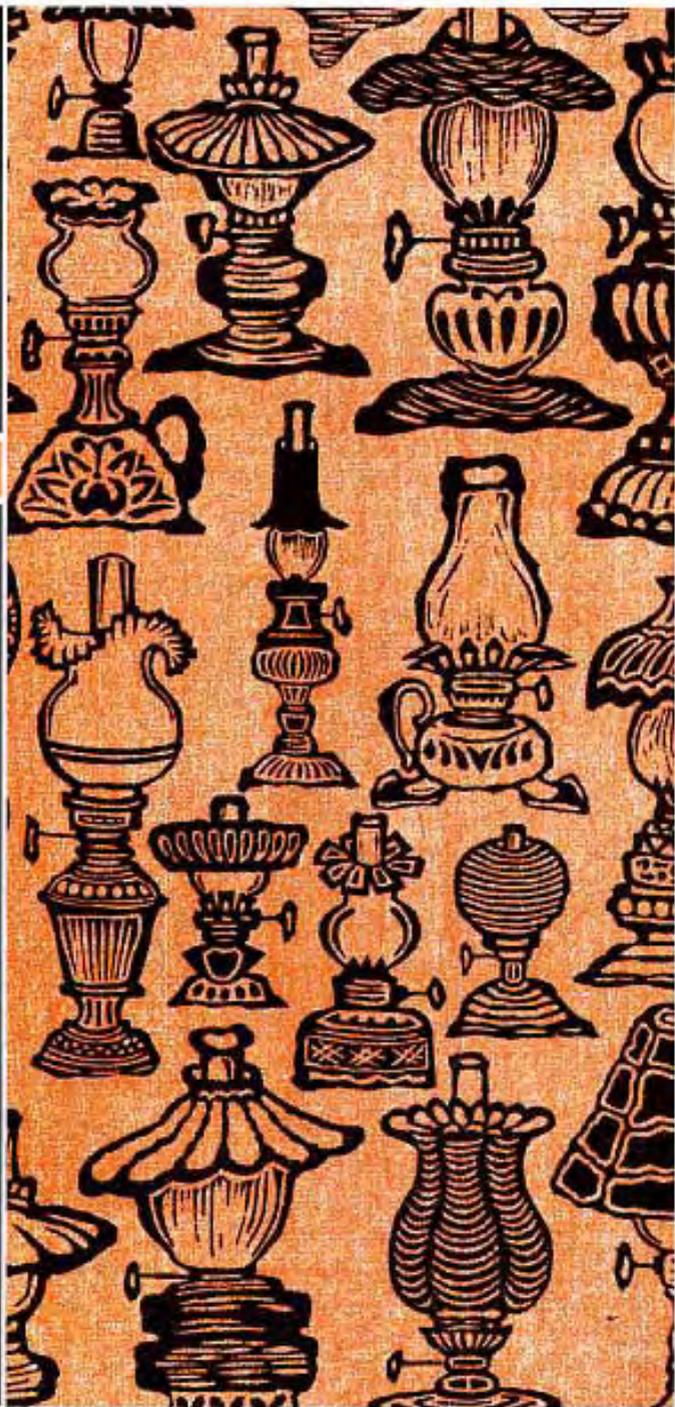


春日燈

3

月号

MARCH 2007



安住 敦の句

栄達に遠しはこべら道に咲き

句集『歴日抄』昭和四十年

年譜に昭和二十四年、官業労働研究所に勤務とある。景山筍吉氏の推挽であつたが、職場が憂鬱で辞めることばかり考えていたと言う。もともと就職は栄達のためではなく、家族を養うための仕事場であつた。へはこべら道に咲きは控え目ながら俳句界で生きて行く強い意志が窺える。先生は、身辺に起きる喜怒哀楽による情緒の機微を暖かく詠う俳人であつた。

園 部 蒨 郷

安住 敦の句

落椿折り重なつて相對死

句集『柿の木坂雑唱以後』平成二年

最初やはり相對死に些か驚くが、何時の間にかその景に誘い込まれている。不思議な諷詠で、例えば相對死の語尾が、じにと、一音溶み出る処も曲になっている。さてこの時の師の胸に、あの近松の書く世話物の一場面が浮かんでいたかどうかは知らないが、いずれにしても師のお目に止まったこの落椿、尚も瑞々しく、且つ哀歡を尽した人の死に顔の如く、穏やかなものだったと思う。

太田 具隆

西ヶ原日記 (二六)

鈴木榮子

仏教高校涅槃図拓ぐ体育館
早春の湖指すゆびを撓はせて
紙風船吐息交りに膨らめり
苜蓿の四ッ葉見付けしことなくて
道明寺糰に餡のお納戸色

残り鴨ひとりが好きならむ
雛購はず雛が残ればかはいさう
春分といふ公平な一日かな
一日が早し日迎へ日が帰る
治聾酒や黄泉に届くれば帰られず
桜咲き夜目に白きよ明日ゆかな
両の手に掬ふほど散る落花かな

入山名簿

林
紀
夫

春曉や入山名簿念入りに
春光や葉擦れ楽しむ尾根歩き
馬の背の尾根の岐れや春嵐
鎖場の雪解雫や行者道
雪解風磴登りつめ奥の院
料峭や頂上で聞く鳶の笛
春蟬の声の癒しや白湯を汲む
春雷やせき立てられて下山道
残雪の丹沢指呼の間合かな
中腹の古刹に詣づ養花天

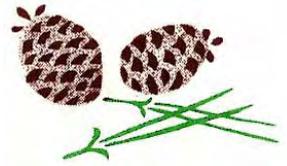
雪のこゑ

割田容子

初旅の北を目指せるしづごころ
築三百年囲炉裏の宿の奥会津
雪の闇屋号とろとろ灯るかな
古時計とよもす音や真夜の雪
日の芯の芯に納まり雪安居
塔のへつり雪への祈り諾ふも
野うさぎの足跡大き雪月夜
凍滝や沈思黙考解かざりし
雪のこゑこころ平らに保つべく
冬銀河家路の彼方知らせくれ

当月集

鈴木 榮子選



○ 荻野嘉代子

菊五郎の「芝浜」締めし獅子の舞

初夢の団居やこの世彼の世より

黒豆に母の好みし紅草石蚕

デパートの出前初席傘回り

寒詣揃ひし太鼓闇を攻む

○ 久保久子

懸大根旨みをかもす皺の数

数へ日や錐ををろがむ指物師

俎始め未練きつぱり絶ちにけり

波音のゆつくり返る三日かな

祈るてふこころの支へ齋粥

○ 生方義紹

壮齡の父の肉筆小六月

念ずれば通ずの謂や返り花

カラオケの軍歌十二月八日過ぐ

ぬるき茶や免罪符めく賀状書く

ルノワール風の膝掛何を読む

○ 横田初美

初雀今朝は供米ぞつつしめよ

子に伝ふお節料理のさしすせそ

雑煮椀母には霰餅浮かせ

利根川に潮の差しくる恵方かな

雪道へ踏み出す思ひ初日記

○ 上野進

靴買ひに冬至十日の昼さがり

日本男児独り遊びの柚湯かな

木枯も乗り込み島の連絡船

舞ひ過ぎて独楽の命も飛び去りぬ

手鞠つく少女の五指を全開に

春燈の句

鈴木 榮子選

野の末の一本杉や雪女郎

カナダ 廖 運藩

丈なす髪ずしりと重し雪女郎

地の涯の犬の遠吠雪女郎

聖歌唄ふカナダ生れの雪女郎

鐘の音は遠くに在りて年惜しむ

居ながらに真夜の鐘の音年流る

後先を譲る鴛鴦池暮るる

満堂の静寂を破る大きくさめ

何もない一日が宝日記果つ

表札のローマ字ばかり枇杷の花

仏恩の身に沁む落葉掃きにけり

寒禽と對話楽しむ神の杜

名勝庭園寒禽池に囲ひけり

河豚鍋や夜景の贅の城見の間

東京 岩井 泉樹

糠床を搔くセーターの腕まくり

蜜柑むいて小津安二郎忌なりけり

産土へお里帰りの初日かな

寒鯛の刺身醬油を弾きけり

寒鯛の鱗はりつく口の中

病院の床屋で正月頭かな

俳人の墓に回し年の暮

利根に映り霊峰染むる初日かな

人日の値引競争せぬ店主

人日や朝夕歩き句の湧ける

小春日や表参道カフェテラス

健啖の卒寿の母や冬至粥

着ぶくれて老いの一徹通しけり

第九聴く何時に変はらぬ年忘

千葉 中村春宵子

長崎 増田 菖波

茨城 君塚 敦二

余言

鈴木 榮子

数へ日や錐ををろがむ指物師

久保 久子

指物は木をさしあわせて組み立てて作った器具であるが、素質のある器用な人でなければ、木製の箱、机、筆筒などを作る事は出来ない。職人技の範疇に入るものである。修業中の人ではなく、自他ともに指物師と認めている人が指物師である。

金釘は使わないが、その細工には錐も大事な工具である。錐を両手の掌に挟んで揉む形が、ちょうどおがむ形になるところからこの句が出来たのであろう。

十八年度春燈賞を受賞した作者であるが、作句に緻密さがとみに加わった。もともと作句力はあったが、このところよく言葉を選び、的確に用いて一段と句境を深めている。

逢ひたしと黄泉に出したき年賀状

神山 志堂

黄泉に手紙を出すことが出来れば随分心が解放されるこ

とだろ。黄泉の様子は全く分からないのであるが、現世であの世の父にでも母にでも思いを発信すれば、父、母には届くという。こちらの思いが黄泉の国の人に通じるといふことは嬉しいことだ。専門的に言ううと靈感の問題になると思うが、誰でもふつと亡き人に助けられたような思いがすることがある。

虎落笛、ミステリアスな古校舎

内野 俊子

少子化の当世、古い校舎が地方にも都会にも、がらんどろのように残されている。

使われていない校舎で目をつぶると、かつての学童達の声が聞えてくるようで懐かしい。

放課後の校舎は、静寂と多少のミステリアスを抱えているものである。まして使われていない校舎に風が吹つけて鳴ると、それが声なき声となってミステリアスを深める。(以下略)